

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520404

研究課題名(和文) 伝播類型の視点からみた日本語形成史の試論的研究

研究課題名(英文) Development of Japanese Dialects from a viewpoint of the influential movement of central Dialect and its localization

研究代表者

彦坂 佳宣 (HIKOSAKA YOSHINOBU)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00111237

研究成果の概要(和文):

『方言文法全国地図』の意志・推量、条件表現、敬語類などの言語地理学的研究に、国語史の知見、また特に近世期地方方言文献を探索・考察した研究により、およそ5種の伝播類型を見出し、それによる日本語形成史を試論的に考察した。

研究成果の概要(英文):

This paper investigates the developmental process of Japanese language included in dialects by analyzing the pattern of its propagation. The paper focuses on conditional expressions, expressions of will and conjecture, and polite expressions found in *Grammar Atlas of Japanese Dialects* (GAJ) and investigates them from the perspectives of geo-linguistics, Japanese historical linguistics and dialectology. As a result, five patterns were found. They share a concentric pattern of language distribution originated from Kinki, the ancient central area of Japan, as the base. Additional patterns include contrasting patterns in Eastern Japan and Western Japan, and two new concentric patterns originated from Edo and Tokyo, the city area in the eastern region, and Keihan, the city areas in the western region.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語形成史 伝播類型 『方言文法全国地図』 国語史 方言史

1. 研究開始当初の背景

『方言文法全国地図』の幾つかの主要事項の史的研究の中で、中央語が地方に伝播するのに類型のあることが想定された。この類型を整理して中央語と地方方言をふくむ全国的な日本語の形成史を考察したく、その試論

的な研究を企てた。

2. 研究の目的

『方言文法全国地図』の各種文法事項の史的伝播類型の点を中心に考察し、この点から日本語形成史の試論をなす。

3. 研究の方法

上記の具体化を次のとおりに進める。

『方言文法全国地図』の言語地理学的な研究、

これを国語史研究の知見と比較検討し、

これを近世期の地方方言文献を発掘し、

その研究による地域方言史を試みる。

従来、までの研究が多く、本研究はも加える。これらを総合して対象とした事項の限りでの日本語形成史の試論とする。

4. 研究成果

4.1 今回の課題で直接に研究した事象は次のものである - 意志・推量、勧誘表現、条件表現の諸種、敬語事象、この他、格助詞の主格ガ(ノ)の顕現、活用体系なども手がけた。一方、予定していたアスペクト、可能表現、その他は研究が深められなかった。

4.2 使用した地方方言文献

見出したものなどは次のものがある--近世後期尾張地方・庄内地方・九州地方の郷土本類、土佐の藩士日記類、中国地方「田植歌」、桑名日記・柏崎日記、中国石見地方の説教集(米谷隆史氏紹介)、漂流民ゴンザの資料、その他。

4.3 研究成果の内容

4.3.1 各事項の研究をいちいち記述することは止め、主要な視点である「伝播類型」からまとめる。研究した事象の限りで類型化すると、およそ次の5つが挙げられる。互いに排他的ではなく、大きく周圏分布を基底にそれぞれの特色を見せることが特徴である。

a. 全国周圏型、b. 全国周圏型+東・西別での新形の展開型、c. 東西不均衡型、d. やや各地固有型、e. 社会構造との関連が大のもの

4.3.2 各類型とその所属事象の模様

a. 全国周圏型 - この型は、近畿中央から東西にほぼ同心円状に諸形式が展開するものである。国語史の推移がほぼ順当に地方語に伝播していった型と考えられる。

まず、各種の「仮定条件表現」がこれに該当する。GAJ 126 図「早く起きればよかった」、

167 図「雨が降れば船は出ないだろう」、169 図「前が行くとその話はだめになりそうだ」、132 図「先に起きるなら飯を作っておいてくれ」、168 図「あした雨が降ったらおれは行かない」の各種用法5種で見たとこ、動詞「起きる」を例とすれば、概括して、近畿付近に~ヤッタラ/タラ専用化傾向、その東西両脇に「起きリヤー」など前項動詞とバとの融合形、東西の端は「起きれば」とバ後接形の分布である。132 図では岩手付近に古典語に対応する「未然形+バ」もある。これらは国語史の変化と一致し、また過去の方言文献の点綴による推測からこの分布はほぼ近世期には成っていたと考えらる。

偶然確定条件の GAJ 170 図「行ったら終わっていた」でも似た傾向、逆接確定条件の2種、GAJ38 図「寒いけれども我慢しよう」40 図「植えたのに枯れてしまった」でも、バツテン類・ドモ類にこの模様が認められた。ただし、これらは全国的な分布模様からは、a. を元にした細分化の b. に入れるのが適当と考える。

b. 「全国周圏型+東西別中央での新形展開」 - この型は、古く近畿地方から全国的な伝播があり、その後、近世期に上方語の要素が江戸語に飛び火して東西2つの中央で発達し、結果として大きな周辺分布の中に、東西2つの中央地域を中心に新形式がある型である。

まず、「逆接確定条件」事象の2図のうち、GAJ38 図「寒いけれども我慢しよう」では、概括して東西周辺にバツテン・ドモ、その内側にガ、中央付近にケレドモがあり、

と は日本の東西別の中央を中心にそれぞれ周圏的分布をなす。これは、古く が近畿中央から全国に伝播し、その後、続いて が近畿から、次に が上方から江戸に飛び火して広がったと見る。国語史の知見によれば は近世期に盛行したことから、GAJ の分布模様は近世には成っていたと考えた。

同じく 40 図「植えたのに枯れてしまった」は、GAJ38 図「~けれども...」とほぼ同じ分布の中に、近畿周辺、関東中央にノニが広がる分布であり、同じ歴史が考えられた。ただ、

国語史ではノニはケレドモよりやや遅れて発達し、近世後期以降であり、この型の発現は38図のケレドモの場合より遅れたと考える。38図と40図の事象がそろってこの型となるのは近世末か近代初期であったろう。

次に「順体助詞」事象について、GAJ 45図「この手拭はおれのだ」、17図「行くのでは(ないか)」などもこれに入る。順体助詞ノ・ガは連体格の修飾の後続体言の省略から発達したとされる。国語史ではそのノとガに用法差があり、やがてノ連体格が優勢となったが、この変化が遅れた地方にはガが遅くまで残った。この時間差によってガ順体助詞は地方で発達し、いま土佐・北陸から新潟などに見られ、中央地域ではノが広く発達し、代名詞的用法から辞的用法(接続助詞ガ(ン)ニ・ノニ、ノデなどの一部)となり対象化の作用を果たすまでになった。

国語史での体言代用用法は中世末、辞的要素にまで及ぶのは近世に入ってからと考えられる。一方、地方の場合、今でも中部地方・山陰、関東地方西部などでは体言代用の用法はあるが辞的用法が無く、接続助詞は単独のニ・デのままの地域がある。他に、九州には引用・指定などのトから発達したもの、南奥ではナ(確証はないがナリからの発達か)、また形式体言コト(トコとも)によるものもある。

このうちト・コト、ガの類は周辺的分布であり、ノは中部地方の辞的レベルの用法のない地域を挟んで西日本と東日本の中央部にある。すなわち形式は各様であるが、大きくノ以外の形式が周辺分布し、ノは東西の中央部にあり、これらが辞的用法として乏しい空白地域 - 山陰、中部地方、関東西部地域など - をその左右に配した形の分布をなしている。すると大きな周辺分布の中に東西の中心地域からのノの放射という型が見えてくる。内側の分布形成には、近世期以降に隆盛したノ順体助詞の、上方から江戸への伝播が関与していると考えられる。すなわち、近世期以降の二都での新形の放射が関与する。

「必然確定表現」では、GAJ37図「子ども

なので分からなかった」の本州中央部に近世後半期からノニが発達し、これが上方と江戸にある中に、中部地方ではモンデ形である。これは上方でのノニが江戸に飛び火し、モンデはその中間で古態のデガモノ + デ形となったと考える。そして、33図「雨が降っているから行くのはやめる」をこれに重ねると、西日本では、周辺にデ、ノデとモンデの地域、つまり本州中央では分析的表現が興り、周辺地域ではなお単一の他形式でなされている様子が見える。なお33図そのものの全国的模様はC.と見る。

c. 東西不均衡型 - この型は、東西の地域で諸形式が不均衡に分布するものとする。その多くは、西部でやや多形式が密な形で等語線線を形成する一方、東部地域では単一の近い形式が大きな分布領域を占める形である。しかしこの型も、その史的経緯をさぐれば、周囲的な分布の上に地域的変化の遅速差が加わった結果と思われる。換言すれば、早い時期の周囲分布が次の段階で不均衡な分布へと向かったものである。

これには、まず「意志・推量」事象がある。意志と推量は関係が深いので「意志/推量」のセットで見る。また具体形が必要な場合、五段活用は「書く」_レ、一段活用は「起きる」の語例で示す。

分布は、番号を付けてると、近畿と近くの四国付近に「ウ・ヨウ/～ヤロー」_レ、中国地方で「ウ・起きユー・起きヨー/～ジャロー」_レ、九州は「ウ・起きユー/～ジャロー」_レ、対して東海・東山は「(ウ)ズ-書かず・起き(ー)ズ/～ダラズ・(オキル)ダラ・ズラ」_レ、関東中央および新潟付近は「ウ・ヨウ/～ダロー」_レ、太平洋側を主とする東北は「ベー/ダンベー」である。ここには、ウ(ヨウ)主体の西部と、(ウ)ズとベー主体の東部という、大きな東西差がある。なお、ウを元にした推量の～ジャロー・ヤロー・ダローは断定辞の地域差に依る。これに加えて、周辺には一(二)段活用のラ行五段化があり、九州南部・土佐、新潟ないし山形県以北では「意志-起きロー/推量起きるロー(古典語「らむ」

出自)型で、意志形は国語史に稀なラ行五
段化へと類推した新型、推量では古典語「ら
む」出自のロー、東海・東山、山陰の一部で
はそれがラとなる、古態形に由来する形式、
こうした「意志/推理」の組み合わせがある。

この分布の解釈は、東部のペー、ウズは古
典語由来のもので、一旦は西日本にも伝播し
たが新しいウ類に淘汰された結果として消
滅したと考えられ、かつては周圈的分布が想
定される(ペーの痕跡は見当たらないが、ウ
ズは隠岐・瀬戸内海島嶼、その他に)。それ
が西日本で新形式の速やかな伝播によっ
て消され、結果として東西が不均衡な分布と
なったのであろう。すなわち西部での新形の
発達と伝播は急であり、東部では国語史の古
態形式が広く存続する傾向がある。

こうした不均衡な模様、の「新形
のラ行五段化/古態の「らむ」出自のロー・
ラ」型があり、この点ではほぼ全国的な周
圈的分布をなしている。その内実は、一(二)
段活用の「意志=ラ行五段化という類推によ
る新形/推量=「らむ」推量の古態」が同居
するもので、地域方言に特有の方向を示すも
のであろう。話しことば主体、規範性に縛ら
れない地域的な性格が関与したと考える。

こうして、かつては周圈的分布を基本とし
ながらも、東西での伝播進度の違いなどによ
る不均衡が発現し、加えて周辺地域のの
「新/古」の周辺分布がとりまいている。な
お、ラ行五段化は過去の方言文献に依り、近
世末前後の発達と考えた。すると、かつては、
推量ロー・ラを含め、もっと周圈的分布に近
いものであったことが想定される。

先にb.とした「必然確定条件表現」は、中
央地域を除くとこの型にも該当する。GAJ33
図「雨が降っているから行くのはやめろ」で
は、西日本には近畿から西へサカイ類/ケン
類/デの並びで多様、近畿に隣接する東海・
東山にもデがあり、さらに古い二もある。こ
れを見ると、西日本は、大きくデが周辺、ケ
ン類が中間(但し、東部にはまず無い)、サ
カイが中央の周圈的分布をなす。対して東日
本は、日本海側に西部のサカイ類が北上する

が、太平洋側は広くカラー色である。かなり
東西が不均衡な分布となっている。これは、
西日本にも潜在したカラが東日本で早くに
広く発達したためであろう。

形式数と伝播模様も不均衡であり、西部に
は複数形が重層、一方の東日本では、古く近
畿の語形類のホドニ・ヨッテ・サカイの進出
している日本海側を除き、ほぼカラー色に近
い。なお、西日本のケン類の由来は確定せず、
その由来を重視すれば別型の可能性もある
が-カラ・サカイ、已然形+バ、故(ケ)由来
の諸説あり-、現況の分布としてはこのよう
になる。

また、「動詞活用」特に九州での二段活用
の残存、中国地方以西でのラ変の保有、また
これらの幾らかの変化もここに入れる。これ
らの点は西日本で旧活用型が保有されやす
く、対して東部は規範の緩さ、換言すれば話
しことば主体の変化自由度もあって、文法事
象としては単純・整合化を早くに遂げていく
趨勢がある。詳しい考察には至らなかったが、
変格活用もやや東部における変化が激しい
模様があり、これも含めて言えると思う。

d.社会・文化的面との関連が大のもの-こ
れは、同じく周圈的分布の基底の上に、その
形式が社会・文化的な条件基盤によって採用
されたり不要であったりするものとする。敬
語類がこれに該当する。

敬語は文法事象として扱われる一方で、そ
の使用が義務的でなく、文体や語彙的な面も
強い。社会構造や場面によって、必要とされ
る場合とそうでない場合とがある。こうした
条件が関与している事象である。

「対称代名詞」をGAJの「あなたの傘」333・
335・336図の待遇差をもつ3場面で見つ
く。国語史での変遷の概要は、待遇の高い順に中世
末にはほぼ「こなた/そなた/わごりよ・お
ぬし/われ/おのれ」の五段階とされ、近世
前期には新規に「おまえ」が高位置に採用さ
れ、近世後期には同じく「あなた」に代わり、
全体にいわゆる敬意低減を起す交代をお
こした。さらに近代になるとオタクが現れ、
加えて目上を代名詞で呼ぶことを避けて称

呼や役職で呼ぶという大きな変化が起きた。そして、これと同じ変化がGAJの諸図からも読み取れた。

しかしd.に関連する点は、まず「称呼」類の分布は、本州の中央を主とし、加えて人口増加率の高い都市部において見られ易い。高度成長期の人口増減の地図と、問題の諸図を重ね合わせると、「称呼」形式が人口増加の著しい地域とかなりよく重なるのである。丁寧な表現を必要とする都市部と、顔見知り同士で必ずしも新形式の受容を必要としない地方との差が考えられる。オタクはそれほど都市部に偏らないが、傾向としては似ている。一方、各地には特有の方言形が生まれ、中央では待遇の低下したオマエ類が鹿児島その他の地方都市などでオマハン・オマンサー、オマンなどの固有形を見せ、方言化が進んでいる。

このは、新形式を受け入れる社会的な基盤の有無ないし強弱と関わるものであろう。

なお、「称呼」形式は、従って関東・近畿の中央部に多く、その間の中部地方にはさして集中しない。他の形式の周辺的分布を見合わせると、「対称代名詞」事象は、上記b.「全国周圏型+東西別中央での新形展開」にも属する。

「尊敬語述部」も同類である。多様な形式のある中で、九州と東北にはヤル敬語、「申す」の尊敬語化ないし丁寧語化による変化形式が多い。一方、中央地域にはナサル類とオ...ニナル類がある。さらにオ...ニナルは都市部に多く、地を這うような伝播模様はない。全国的にはa.の型でもあり、また新形式が東西中央にある点でb.でもあるが、「対称代名詞」と同じく、社会・文化的な基盤と関わる点に注目して、d.に入れる。

e. やや各地固有型--ここには既に述べた「準体助詞」事象を、九州にト、東北にナ・コト、土佐・北陸付近にガがある点で各地に固有の型と認定してこのe.型に入れることも考えられる。しかし、その背後にはやはり国語史との史的序列による関連が見られ、固

有型としては弱い。

強いて挙げれば、「仮定条件」の中で、佐賀県にはギー、また九州東部にはやや離れたナラ、東北太平洋側にはト・タラの局地的な分布がある。これらは何らかの条件が働いて地域固有の摂取・定着をしたことが考えられる。

しかし、この型に属する典型的な事象はまだ見られない。今回の課題は地域差の大きな事象の考察を中心にしたためであろう。今後はもう少し個別性のある、地域発生的な事象に目を向けてこの面の可能性を考えたい。

4.4 特色ある諸点

こうした型とは別に、いくつかの観点からの特色についても簡単に触れておく。

まず 地方語の総合的表現、中央語の分析的表現の面が、「意志・推量」「逆接」「順接確定条件」「順体助詞」などの事象に見られた。近代語へむけて分析的表現が強まることは国語史研究で指摘があるが、方言を含む日本語全体でも中央語にその傾向が強い。ただし、「順体助詞」のように各地でその辞的用法がおこる場合もあり、例外はどういう場合かの研究も必要である。

国語史に見られた変化が形式は違うが地方語で見られること - 中央語で一段活用型の意志形ヨウの分化が起きたことが、周辺地域ではロー形化する事象が該当しよう。詳述は省くが、語幹安定によるヨウ分化が、周辺地域ではヨウ分化方向が妨げられた結果ロー化した、しかし語幹安定のためという点では同じメカニズムである。意志形から推量専用形が分化したことが、ベーなどでもおこったことも同類である。このように日本語一般の趨勢の面をさらに考察する必要がある。

4.5 まとめ

今回の課題で考察してきた諸事象の限りで、特色を幾つかの型に分類して述べた。背後には強弱の差はあるが、どれも方言圏論的な分布と歴史が基盤にあり、それが地域的発達の違いにより、各種の型として実現してきたという感想を抱く。

日本語形成史からは、今日の事象は、よ

く言われるように国語史の中世末頃までの形式との対応が見られる、伝播特徴では、西部で新形式が盛んで、瀬戸内海を経てか、速やかな伝播により諸形式が重層しやすく、東部では国語史のスケールでは古く少数の形式が広く展開しやすい。東部での変化は時代差があり、古くは西部の新形が北陸・日本海側を北上、近世以降は江戸から太平洋側を北上する型が見られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

彦坂佳宣「条件表現からみた近世期日本語の景観 - 『方言文法全国地図』と国語史・近世方言文献の対照から - 」『近世語研究のパースペクティブ』笠間書院、2011年、査読無、216頁

彦坂佳宣「寒いけれども～」- 『方言文法全国地図』の解釈-逆接確定表現の言語地理学的考察-、2010年、『日本語の研究』6-4、査読有、110-125頁

彦坂佳宣「近世後期庄内郷土本類の順接条件 - 『方言文法全国地図』解釈の前提として - 」2010年、『同大語彙研究』12(同志社大学国語研究室) 査読無、27-42頁

彦坂佳宣「東海・東山地方における意志・推量表現の交渉と分化」『論究日本文学』91(立命館大学日本文学会) 2009年、査読無、1-12頁

彦坂佳宣「愛知・岐阜・ナヤシ地域における勧誘表現」2009年、『名古屋・方言研究会会報』25、査読無、21-40頁

彦坂佳宣「『方言文法全国地図』の分布と文献国語史との相関」『日本語学』9月臨時増刊号、2007年、査読無、115-126頁

彦坂佳宣「諸方言史の束としての日本語史」『國學院雑誌』108-11、2007年、査読無、298-310頁

彦坂佳宣「仮定条件法の全国分布とその解

釈」2007年、『安達隆一先生古希記念ことばの論文集』、査読無、310-325頁

[学会発表](計2件)

彦坂佳宣「条件法からみた日本語史の景観」2010年10月22日、近代語研究会(愛知大学豊橋キャンパス)

彦坂佳宣「ナヤシ地方における推量表現の分布とその特色」近代語研究会(関西大学) 2007年5月25日

6. 研究組織

(1)研究代表者

彦坂 佳宣 (HIKOSAKA YOSHINOBU)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00111237